



大学教育再生加速プログラム

崇城大学 大学教育再生加速プログラム (AP)

SOJO University Acceleration Program for University
Education Rebuilding : AP

平成29年度 取り組み報告書

崇城大学
SOJO UNIVERSITY

崇城大学「大学教育再生加速プログラム」平成29年度報告書

目 次

I. 取り組み概要	1
I-1. 大学全体の改革方針における本事業の位置付け等	1
I-2. 事業の全体像	2
I-3. 29年度の事業計画	5
II. 平成29年度取り組み報告	6
II-1. 成果概要（平成30年2月時点）	6
II-2. 全学のアクティブ・ラーニング取り組み調査結果	13
II-3. 29年度の全学SALC・学科SALCでの学修指導の時間割表	26
II-4. 29年度の開催事業：ファカルティデベロッパー錬成会	27
II-5. 29年度の開催事業：崇城大学・熊本保健科学大学大学間連携事業	34
II-6. 29年度の開催事業：大学教育再生加速プログラム特別講演会	35
II-7. 29年度の広報活動：大学ホームページへの本AP事業のページ作成	37
II-8. 29年度の広報活動：本AP事業のパンフレット作成	40
II-9. 29年度の広報活動：本学AP事業の取り組みの新聞紹介	40
III. 平成29年度の学生の主体的な活動	
III-1. 「教職を目指す在学生と先輩教員との教職交流会」を開催	42
III-2. 大学院生と学部生のチームが、第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテストで 「2017年度最優秀賞・文部科学大臣賞」を受賞。	44

I. 取り組み概要

I-1. 大学全体の改革方針における本事業の位置付け等

本学は、戦後まもない昭和24年（1949年）、前理事長・学長 中山義崇が「戦後日本の疲弊を救う道は産業の振興と産業人の育成にある」と痛感し、私塾を創立したときに端を発する。以来、約65年間に渡って、「体・徳・智」という理念の下、科学技術を通じて地域社会に貢献する人材を育成してきた。平成12年（2000年）芸術学部の新設に併せて、校名を熊本工業大学から崇城大学へ変更し、さらに平成17年（2005年）薬学部を開設して、5学部体制となって現在に至っている。また、全学科から大学院進学への道が開かれている。一方、平成5年（1993年）から始まった18歳人口の減少や、同年齢の若年人口の過半数が高等教育を受けるというユニバーサル化、日本社会のグローバル化の進行などの環境の変化の中で、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（平成20年）や、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（平成24年）などを受けて、現理事長・学長 中山峰男は「社会を真に救うには、たとえ一隅といえども、社会を変革し続ける能力を持つ人材の育成が急務である」と考え、その育成のため、(1) グローバル時代に対応する社会人基礎力の養成、(2) イノベーション・発明発見能力の錬磨、(3) 起業家精神の陶冶、なる3大方針に基づいた、本学の教育改革を行っている。特に(1)については、平成23年「崇城大学教育刷新プログラム(SEIP)」をスタートさせた。それは、(A) 体・徳・智の三育増進によるグローバル実践育成プログラム、(B) オーダーメイド型自立支援プログラム、(C) 教育評価制度・組織改革プログラム、(D) 教職員のFD/SD推進プログラムの4本柱からなる。また、本学では、グローバルに活躍できる技術者育成を目指して、英語教育の抜本的見直しを行い、平成22年度より15名に及ぶネイティブの教員によるSILC(Sojo International Learning Center)を立ち上げ、英語によるコミュニケーション重視の英語教育を行ってきた。同時にアクティブ・ラーニングの実施のために、SALC(Self-Access Learning Center)なる施設も設置し、専任教員を配置して、独自の英語教育の自律学修プログラムをも構築してきた。全学学生数約3,500人の内、SALC利用者数は4年目で当初の10倍以上の約18,000人/年まで増大し、本学学生の自律学修マインドの育成に貢献してきた。しかし、上記の三大方針(2)、(3)を実現するためには、卒業研究の質のさらなる向上をはかるとともに、全学年での学生の能力開発を積極的に行うことが必要であり、そのためには、多くの専門科目等におけるアクティブ・ラーニングの普及が課題となっている。

そこで、本事業においては、これまでSALCで培ってきた自律学修マインド育成のノウハウを、全学の専門科目等に波及浸透させることを目的として、本学アクティブ・ラーニングの拠点となる全学SALCならびに学科SALCを設置する。また、これらのSALCにおいて、個々の学生の自律学修を促し、各専門科目の講義と図書館利用を連携させる、ファカルティーデベロッパー（教員）及び学生ファシリテーターの育成を目指す。さらに学生証をICカード化し、図書館の入退館システムと連動させて、学生の自律学修時間を把握し、単位の実質化をはかる。

I - 2. 事業の全体像

上述したように、本学では平成 25 年度より中長期計画として、(1) グローバル時代に対応する社会人基礎力の養成、(2) イノベーション・発明発見能力の錬磨、(3) 起業家精神の陶冶、なる 3 大方針に基づいて、教育改革を行っている。特に (1) については、すでに平成 22 年度より、グローバルに活躍できる技術者育成を目指して、英語教育の抜本の見直しを行い、15 名に及ぶネイティブの教員による SILC(Sojo International Learning Center) を立ち上げ、英語によるコミュニケーション重視の英語教育を行ってきた。また同時にアクティブ・ラーニングのための

SALC(Self-Access Learning Center) の施設も設置し、専任教員を配置して、独自の英語教育の自律学修プログラムを構築してきた。下図は、SALC の年間延べ利用者数の変化を示している。SALC は、開設当初こそ、年間の延べ利用者数が約 1,500 人（全学学生数約 3,500 人）であったが、開設 4 年目の昨年度は、年間約 18,000 人にまで増大し、本学学生の自律学修マインドの育成に貢献してきた。

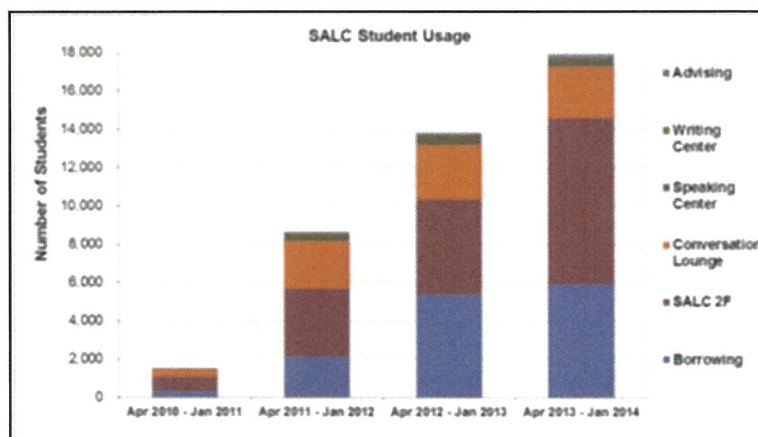


図 SALC 利用学生数 2010 年 4 月～2014 年 1 月

この育成のノウハウのポイントは、次の 3 つである。

- ① DVD や書籍などの英語教材と設備を備え、ICT(Moodle) を活用した講義外の自律学修ができる（宿題等の実施も含む）。
- ② ラーニングアドバイザー（専任教員）が 3 名、専従職員が 1 名常駐し、学習アドバイジングスキルを活用して、教材の選定や学習方法の助言（主体は学生）を行う。
- ③ SALC アクティビティーを独自に作成し、学生が利用した分を 10% SILC の成績に反映する。

これらの学生の自律学修を促すノウハウを、全学の専門科目等に波及させることによって、本学における教育の多くがアクティブ・ラーニングの要素を取り入れることが可能になり、学生の主体的学びの促進、学修時間の確保につながる事が期待される。そこで、本事業においては、上記、中長期計画の 3 大方針の (1) グローバル技術者育成をさらに加速し、(2)(3) の基礎となる学生の主体的学びのマインドを醸成するために、具体的に次の事業を行う。

(I) 全学的なアクティブ・ラーニングの拠点となる全学 SALC および学科 SALC の整備とファカルティーデベロッパーの養成、および図書館との連携

本学では以前より、講義に関連した指定図書等を毎年選定して図書館に配置してきたが、学生の利用については十分とは言えなかった。そこで 26 年度より、講義の課題として、この指定図書等の図書館蔵書を利用したレポート提出を、全科目について義務付けるように全教員に依頼した（シラバスにおける具体的準備学修内容の記載）。前述の SALC においては、「SILC 講義の課題→SALC でのラーニングアドバイザーによ

る自律学修のサポート→講義外の学修時間の確保→課題または課題以外のワークシートの提出→講義の理解（単位の実質化）と成績の向上」の好循環が回り、SALCの利用者も非常に増大している。そこで、この自律学修の好循環を全学の専門科目等に普及するため、全学 SALC および学科 SALC を整備し、自律学修をサポートするファカルティ・デベロッパー (FDer) を配置するとともに、大学院の全専攻 (10 学科に相当) から学生ファシリテーターを選抜し、主に専門科目の課題相談・学修を支援する。これによって「専門科目等の課題→全学 SALC・学科 SALC での FDer・学生ファシリテーターによる課題作成のサポート→図書館の指定図書等の利用→課題または課題以外のレポート提出→講義の理解（単位の実質化）と成績の向上」の好循環を作る。

全学 SALC は、当初は学内のほぼ中央に位置し 25 年度に竣工したアクティブコモンズ (多目的講義棟) の 2 階に整備したが、その後、上述した図書館との連携を深めるために、図書館 1 階に移設した。また、学科 SALC は、各学科棟に一つずつ整備する。本学では 23 年度から「崇城大学教育刷新プログラム (SEIP)」を実施し、その中で「教育重点教員制度」を構築した。これは教員の教育業績を評価し、昇格等に反映させる本学独自の制度である。そこで、これまでの 4 年間の SALC 活動で培った学生の自律学修を支援するノウハウを、二か月に一回行われる FDer 錬成会を通じてこの教育重点教員に伝承し、FDer を養成する。FDer の活動は、教育業績に反映するようにする。26 年度は、FDer を教養教育を担当する総合教育から 1 名、各学科から 5 名養成し、31 年度までに各学科で 1 名の FDer を養成する。また、各専門科目の課題の相談に対応するために、大学院の各専攻から毎年 1～3 名の学生ファシリテーターを選抜し、この全学 SALC および学科 SALC に日替わりで駐在させる。彼らは FDer とともに、各自の経験を活かして、課題を遂行させるために学生の図書館利用を促進させる。また、このために学生証を IC カード化し、図書館の入退館システムと連動させることで、学生の図書館利用時間を学科・学年・授業科目ごとに把握できるようにする。また、このデータを各科目担当教員にフィードバックし、アクティブ・ラーニングの普及と、自律的学修時間の確保、単位の実質化につなげる。

(II) 学生の海外留学の促進のための SALC 機能の拡張と優れたリーダーシップを持つ学生の養成

本学では以前より、海外の大学との提携を拡大し、現在、世界 11 か国 22 大学との協定を結んでいる (25 年現在)。また、26 年度より、学則に留学規程を設けるとともに、全学的な奨学金制度を設け、学生の留学促進、協定校での学習成果の単位化を目指し、制度の整備をすすめている。

そこで、グローバル技術者育成を目指して、ネイティブ教員によるコミュニケーション重視の英語教育を行っている SILC での講義の目標として、海外留学を掲げ、これを促進するために、SILC/SALC に、異文化コミュニケーション講座を開設する。そして、これまでに留学経験のある学生を、留学ファシリテーターとして SILC/SALC に駐在させ、学生の留学相談の機能を充実させる。そのために、SILC/SALC にも学生 IC カードによる入室管理システム及び教材貸出システムを導入し、SILC/SALC の利用時間・利用状況などを個別かつ迅速に把握できるようにする。

上記 (I) (II) における学生ファシリテーターや留学ファシリテーターは、下級生や他の学生にこれまでの経験を教えることで、自らが、学びの成果を再構築することができ、また、その過程でコミュニケーション能力を養うことが可能になる。これらのファシリテーター業務そのものが、真のアクティブ・ラーニングといえる。これらのファシリテーターの経験をつませることで、各学科・各専攻に、毎年複数の優れたリーダーシップを持つ学生の養成を行う。

大学等名：薬城大学

テーマ：テーマI（アクティブ・ラーニング）

●取組概要：本学独自の英語教育施設(SILC: Sojo International Learning Center)に併設した自律学修センター(SALC: Self Access Learning Center)では、学生が主体的に学修し年間利用者数が4年間で12倍に拡大した。このSALCのノウハウを全学に普及させ学生の自律学修のメインを醸成するとともに、専門科目のアクティブラーニング(AL)化を推進するため全学SALC/学科SALCを設置し、利用時間を可視化して単位の実質化を目指す。

～ALの基礎となる学生の自律学修の醸成とALの普及、単位の実質化を目指して～

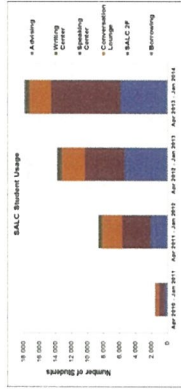
これまでの取組

薬城大学英語教育施設SILC

- ・グローバル技術者育成のため、本学独自に2010年に設立
- ・ネイティブ教員約15名で、講義はすべて英語で実施
- ・学生の英語自律学修を促す支援センターとしてSALCを設置

SALCの特徴

- ①DVDや書籍などの英語教材を備え、ICT(Moodle)を活用した講義外の自律学修(アクティブラーニング)ができる。
- ②ラーニングアドバイザーが3名が常駐し、教材の選定や学習方法の助言(主体は学生)を行う。
- ③SALCアクティビティ(ワークシートなど)を独自に導入し、利用した分を一定の割合でSILCの成績に反映する。



⇒ SALC利用者が4年間で12倍に拡大。学生一人が年に5回は利用。

これからの取組

全学SALC/学科SALCの機能とファカルティデベロップャー(FDer)の役割

- ①FDer & 学生ファシリテーターによる講義課題等に対する学生の自律学修を促す助言の場(図書館の学科推薦図書等の利用等)



- ②FDerを中心に各専門科目にALを普及し、全学/学科SALCで実施



- ③ FDerを中心に自宅学修が可能な専門科目アクティビティを開発

⇒ 主体的に行動できる社会人の育成

【事業の成果】

	26年度 (実績値)	28年度 (実績値)	31年度 (目標値)
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	58.7%	92.9%	100%
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数の割合	35.6%	52.8%	60.0%
アクティブ・ラーニング科目の内必修科目の割合	60%	61%	70%

- ・本事業を実施することで、22年度よりSILC/SALCを立ち上げ取組んできたアクティブ・ラーニングを全専門科目に普及させ、主体的に行動できる人材育成を加速する。
- ・本事業実施により、各学科に学生の主体的学びを支援する学科SALCが設置され、FDerの職能によりFD活動が活性化される。

I - 3. 29年度の事業計画

学科 SALC の設置は平成 28 年度で完了しており、アクティブ・ラーニング (AL) の質を向上させるために、学科 SALC 及び AL 教室で活用できるクリッカーを導入する。また、この他に全学 SALC および学科 SALC でのアクティブ・ラーニングで使用する書籍等を計上する。

その他、28 年度と同様に、FDer および学生ファシリテーターの養成・育成のため、2 か月に一回の頻度で、FDer 錬成会を開き、SILC/SALC の教員および外部講師による、学生への自律学修マインド育成のための、学習アドバイジングスキルを含んだ本学独自のノウハウの伝承を行う。特に本年度は、これまで神田外語大で行ってきた研修を学内で行うためのトレーナー (本学教員 1 名) 育成を行うための費用を含めた謝金・旅費・会議費を計上する。この学内トレーナー育成によって、また、学習アドバイジングスキルの講習会を学内で複数回、全教員を対象に行うことが可能となり、FDer 養成への寄与が大きい。また、この FDer 錬成会は地域の高校教員にも開放できる開催日を設け、高校生に寄り添いながら、高校生のメタ認知能力を上げ、自らが明確な学習目標を設定し、目標達成に向けて行動ができ、さらには高校生が自分にあった学習方法を自ら選択するようにサポートする研修を共有する。さらに、本 AP 事業採択校 (テーマ I) で、AL 達成度評価のためのループリックを独自に開発している徳山大学との共同 (29 年 3 月 23 日に合同の中間事業報告会を実施) で、高大接続 7 年間の中で、一人の学生の成長段階に応じた AL の在り方・アクティブ・ラーナーを育成するための評価基準を独自に作成することを試みる。

また、FDer 教員の退職に備え FDer の養成を引き続き行う。

学部・大学院の各学科・専攻から推薦された学生ファシリテーターには、その活動時間に応じて謝金を支払う。また、SILC/SALC での留学支援は引き続き行い、国際交流センターとの共同で、異文化理解・留学促進のための異文化交流イベント・留学報告会を開催するとともに、留学ファシリテーターとして学内の留学相談窓口である国際交流センターに駐在させ、学生の留学相談の機能を充実させる。この留学ファシリテーターにも、活動時間に応じて謝金を支払う。

さらに、本年度は、AP 採択の他大学への視察の回数を増やし、本学の取り組みの参考とする。

II. 平成 29 年度取り組み報告

II-1. 成果概要（平成 30 年 2 月時点）

29 年度の本事業では、英語教育施設 (SILC) の中に設置したアクティブ・ラーニングのための Self-Access Learning Center(SALC) の独自の自律学修プログラムのノウハウを、全学の教養科目・専門科目に普及することを目的として、以下の①～⑩を行った。まず本学アクティブ・ラーニングの拠点となる全学 SALC、及び各学科 SALC の設置を完了した。また、全学科から学生の自律学修を促すためのファカルティデベロッパーと学生ファシリテーターを選抜し養成した。これによって、アクティブ・ラーニングの講義数を増やすとともに、専門科目の講義で出される課題の自律学修をサポートし、講義と図書館の利用を連携させた。そのために、図書館に入退館システムを導入し、学生の自律学修時間を把握し、単位の実質化をはかった。

これらの取り組みの成果として、全学 SALC の設置およびファカルティデベロッパーの養成によって、アクティブ・ラーニング形式の講義を受講した学生の数は、25 年度が 1182 人（全学の 1～3 年（薬学科は 1～5 年）の学生数 2453 人に対して 48.2%）であったが、29 年度は 2602 人（全学の 1～3 年（薬学科は 1～5 年）の学生数 2729 人に対して 95.3%）と増大した（31 年度の目標は 100%）。これによって、学生が主体的に学ぶ機会が増大したと思われる。また、ファカルティデベロッパー錬成会によって、ファカルティデベロッパーの各教員は、対話を通じて学生の主体性を育む「学習アドバイジングスキル」を身に付けつつある。これによって、授業の課題に対して、学生自らが主体的に学習する環境が整いつつある。また、学生の図書館での自律学修時間の把握が行えたので、今後、この時間の増大を目標にして、単位の実質化につなげる予定である。

また、本事業の取組は、平成 30 年度より崇城大学教育刷新プログラム (SEIP- II) に独自に発展し、全学の科目のシラバスに記載されている学修到達度目標に対して、学生がどの程度目標が達成されたかを振り返るポートフォリオを実施することとなった。このポートフォリオは、コンピューター上で学生の自宅からでも行えるようにし、最終的に、科目の評価点に結びつけることが全学的に決定している。また、シラバスの成績評価方法の記載欄には、中間試験・レポート・小テスト・成果発表など、これまでの定期試験のみによる評価から、多面的な成績の評価を行うように改訂している。これらの教育改革を、「学生の自律学修マインドを醸成する」本 AP 事業と連動させることによって、「学生が何を学んだかではなく、何ができるようになったか」を常に振り返り、学生の主体的な学びを育むことを目指す。

① 4 月～ 今年度学生ファシリテーター・留学ファシリテーターの養成

平成 29 年 3 月に学生ファシリテーター・留学ファシリテーターの研修を行い、29 年度は、各学科から推薦された学生ファシリテーター 41 名、留学経験のある学生から選抜された留学ファシリテーター 12 名が養成された。

また、各学科 SALC の取組を学生ファシリテーター同士で情報共有するために、SALC ネットを立ち上げた。SALC ネットのミッションは以下のとおりである。

- ①全学 SALC・学科 SALC・留学アドバイジンググループの利用状況の情報共有を、ファカルティデベロッパーの教員とともに定期的に行う。
- ②上記の施設（総称して学科 SALC という）の利用を促進するための改善案や、教える喜びや関わる楽

しさを悩むについて、定期的に意見交換を行う。

③学科 SALC に限らず、学内で主体的に活動している学生にも、SALC ネットへの加入を勧め、活動の内容を広く学内の教職員に知ってもらう。

④後輩の学生ファシリテーター・留学ファシリテーターを育てるための研修会へ協力する。

この SALC ネットの会は、学内で主体的に活動している学生グループの情報共有も目的としており、大学オープンキャンパスの運営に主体的に参加している入試 SAGAS チームや、教員免許取得を目標とした教職サークル、SILC での英語教育を支援する SEA 学生サークルなどが、加入対象となっている。

上記 SALC ネットの会を、ファカルティデベロッパー錬成会（29 年度は 7 回開催）を兼ねた形で、29 年度は 5 回開催し、学生と教員の視点の共有を図った。これらの取り組みの成果として、学生ファシリテーター（大学院生など）・留学ファシリテーター（留学経験学生など）が、後輩学生の主体性を育む学生への接し方や、各自のスタンスなどが身に付いたものと思われる。特に、後輩の学生が少しでも自ら話す環境（場）を作ることの重要性、話しやすい雰囲気を作るための方法などについて、各学科 SALC の取組を共有することで、さらに改善されたものと思われる。これらの学びは、彼らが優れたリーダーシップを有する学生に成長するために非常にためになったと思われる。

② 4 月～2 月 錬成会によるファカルティデベロッパーの技量養成

4 月 20 日第 15 回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：全教職員・学生、話題提供：機械工学科吉良先生、薬学科國安先生） 神田外語学院で行われた「学習アドバイジングスキル研修会」の報告と情報共有を行った。参加者：19 名。

5 月 26 日第 16 回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：全教職員、話題提供：SILC/SALC 宝来先生、総合教育大嶋先生、宇宙航空システム工学科麻田先生、応用生命科学科齋田先生） 各学科で開発された SALC アクティビティーの紹介と情報共有を行った。参加者：教職員 65 名。

10 月 28 日第 17 回ファカルティデベロッパー錬成会・SALC ネットの会（対象：全教職員・学生、話題提供：副学長松下先生、SILC/SALC 宝来先生、応用微生物工学科中山先生） 本学の SILC/SALC は神田外語大学との連携で開設されたが、その神田外大に新しく完成した巨大 SALC を見学に行った教員による報告と情報共有を行った。参加者：24 名。

11 月 17 日第 18 回ファカルティデベロッパー錬成会・SALC ネットの会（対象：全教職員・学生、話題提供：物理 SALC チーム（総合教育上野先生）、応用生命科学科 SALC チーム（生命齋田先生））。両 SALC の活動状況の報告と情報共有を行った。参加者：12 名。

12 月 1 日第 19 回ファカルティデベロッパー錬成会・SALC ネットの会（対象：全教職員・学生、話題提供：情報学科 SALC チーム、応用微生物工学科 SALC チーム）。両 SALC の活動状況の報告と情報共有を行った。参加者：16 名。

1 月 26 日第 20 回ファカルティデベロッパー錬成会・SALC ネットの会（対象：全教職員・学生、話題提供：薬学科 SALC チーム、宇宙航空システム工学科 SALC チーム）。両 SALC の活動状況の報告と情報共有を行った。参加者：17 名。

2 月 21 日第 21 回ファカルティデベロッパー錬成会・SALC ネットの会（対象：全教職員・学生、話題提供：建築学科 SALC チーム、ナノサイエンス学科 SALC チーム）。両 SALC の活動状況の報告と情報共有を行った。参加者：34 名。

2月22日FD講演会(対象:全教職員、講師:南雲明彦「LD(学習障害)が教えてくれたこと〜寄り添う心の大切さ」)を開催し、学びづらさがある学生へのアクティブ・ラーニングを促す寄り添い方について研修した。参加者:93名。また、この錬成会は、熊本保健科学大学との大学間連携事業(熊本大参加者18名、九州ルーテル学院大学参加者2名、文徳高校参加者14名)として行った。

また、2月27日〜3月1日まで、神田外語学院(東京)での研修に、3名のファカルティデベロッパー候補者(薬学科安楽先生、大栗先生、情報学科山路先生)が参加し、「学習アドバイジングスキル」の修得を行った。

さらに、3月26日大学教育再生加速プログラム特別講演会「主体的な学びを醸成するポートフォリオ」(基調講演:岩井 洋先生(手塚山大学)、藤本元啓先生(崇城大学)、パネルディスカッション:指定討論者 田中 岳先生(東京工業大学)、コーディネーター 喜久里 要先生(早稲田大学)を実施予定で、上記のSEIP-II改革の目玉であるSOJOポートフォリオについての研修を行う。

これらの取り組みの成果として、各学科やコースから選出されたファカルティデベロッパーが、7回の錬成会で、アクティブ・ラーニングの手法の研修と、学生と教員の視点の共有が図られた。また、神田外語学院での研修会(SILC/SALCの教員も受講してきた研修)を通して、対話を通して学生の主体性を育む「学習アドバイジングスキル」に触れることができた。この「学習アドバイジングスキル」の研修は、29年度までに合計7名の受講であったが、来年度は、「学習アドバイジングスキル」研修を学内で行えるように、トレーナー1名の養成を行う予定である。この学内「学習アドバイジングスキル」研修で、対話を通して学生の主体性を育むスキルを多くの本学教員へ身につけてもらうと同時に、高大接続事業の一環として、高校教員でアクティブ・ラーニングを担当される方々へも研修の門戸を広げたいと考えている。このスキルを身に付けたファカルティデベロッパーとの対話を通して、学生は、授業での課題に対して主体的に取り組むことが可能になるものと思われる。

③ 5月〜10月 学科SALCの充実およびAL講義の質向上のためクリッカーの導入

クリッカーは教室を選ばず利用できるようAL教室でも利用可能なように可動式とする。

28年度は、機械工学科・建築学科・情報学科・美術学科・デザイン学科に学科SALCの環境を整備し、全10学科に整備を完了した。これによって、アクティブ・ラーニングを行う専任教員数が、25年度の64人から、29年度は158人に増大した(31年度の目標は150名)。

これらの取り組みの成果として、全学科に什器・備品を設置されることにより、アクティブ・ラーニングの授業が活発に実施され、これを実施する教員の数も増大した。

④ 4月〜3月 1年生に導入している「キャリア基礎I(必修)」の科目において、キャリア専任教員及びファカルティデベロッパーの協力で、アクティブ・ラーニングによる講義を実施(工学部・情報学部・生物生命学部)。

27年度から新しく1年生に導入された科目「キャリア基礎I(必修)」において、キャリア専任教員及びファカルティデベロッパーの協力で、アクティブ・ラーニングによる講義を実施した(工学部・情報学部・生物生命学部)。これらの取組の成果として、アクティブ・ラーニング科目の内必修科目の割合が、25年度53%であったのに対し、28年度は61%に増大した(30年度の目標は70%)。

⑤ 4月～3月 図書館入退館ゲートシステム及び学生証 IC カードにより、学生の図書館利用時間・各科目シラバスに記載済みの参考書や図書館学科推薦図書（指定図書）等を利用した課題の提出状況・指定図書等の貸し出し状況等を解析し、このデータを学科・学年・授業科目ごとに把握し、各科目担当教員にフィードバックすることにより、アクティブ・ラーニングの普及と、自律的学修時間の確保、単位の実質化につなげる（その際、図書館の倫理規定等に留意する）。

26年度の図書館利用者数は延べ105,418人であったのに対し、29年度の図書館利用者数は延べ128,977人（2月末現在）と増大している。また、学生の図書館利用の目的調査では、総利用者数の内、講義に関する資料の利用（自主学修）の割合が、26年度には21%だったのに対し、29年度は36%と増大した。

また、個々の利用者の利用時間は、0～30分が28.0%（28年度33.8%）、30～60分が15.2%（同16.7%）、60～90分が14.4%（同12.7%）、90～120分が23.5%（同20.2%）、120分以上が18.9%（同18.6%）であった。全体の図書館利用者数が伸びると同時に、滞在時間も60分以上が増大しており、講義に関する資料の利用が格段に増大しているため、図書館を利用した講義外の学修時間が増えていることが示唆される。今後、これらのデータとアクティブ・ラーニング科目受講者との関連、全学SALC学科SALC利用者との関連について調査を行う予定である。その際には、本学の「個人情報保護規程」に留意する。

⑥ 4月～3月 全学SALC・学科SALCでのファカルティデベロッパーと学生ファシリテーターによる学生の自律学修支援

また、全学SALCは学生の自主学習の場としても利用され、26年度の利用者数延べ76人、27年度の利用者数延べ1,119人学生に対し、29年度の利用者数延べ1,789人と自律学習の促進に寄与したが、学内での周知がまだ十分ではなく、今後さらに利用者を増やす必要がある。また、利用時間は、27年度が延べ560時間だったのに対し、29年度は1674時間と大きく増大した。

⑦ 国際交流センターでの留学ファシリテーターの活動と留学支援

29年度は、国際交流センターに留学ファシリテーターによる留学相談コーナーを設置し、延べ124名（28年度82名）の利用者があった。本学学生の海外留学は、26年度22名、27年度153名、28年度200名であったのに対し、29年度は242名まで順調に増大している。この留学生数の増大は、留学経験者の留学ファシリテーターのアドバイスが活かされているものと思われる。また、留学した後の報告会にも多くの学生が参加しており、今後の益々の増加が期待される。

⑧ 2月～3月 学生の学修行動の把握分析と内部及び外部評価委員による評価を通して次年度の本事業に活かす

28年度は、29年3月23日に外部評価委員会（外部評価委員2名：田中岳（東京工業大学教育革新センター教授、山崎周一（熊本防錆工業（株）元会長））を開催した。その際の提言の一つに「SALCアクティビティーの開発と実施状況のとりまとめ」があり、これを踏まえて、29年5月26日の第16回ファカルティデベロッパー錬成会（対象：全教職員、話題提供：SILC/SALC宝来先生、総合教育大嶋先生、宇宙航空システム工学科麻田先生、応用生命科学科齋田先生）では、各学科で開発されたSALCアクティビティーの取りまとめと情報共有を行った。また、図書館の利用状況データと、アクティブ・ラーニング科目受講者との関連、全学SALC学科SALC利用者との関連などを踏まえて、30年3月27日に29年度の評価委員会を行う。

これらの取り組みの成果として、内部及び外部評価委員会による本事業の検証評価により、本事業が客観的に評価され、進捗した点と不十分な点が明確になることが期待できる。事業のPDCAを回すことに、外部の視点を入れることで、学生にとって真に意味のある事業にできるようになるとともに、教育改革の上で最も重要な、教員の意識改革が行えるものと期待される。

⑨ 2月～3月 次年度新規学生ファシリテーターの育成

平成30年2月21日に、次年度学生ファシリテーターの研修を兼ねた第21回ファカルティデベロッパー錬成会・SALCネットの会（対象：全教職員・学生、参加者：34名）を開催した。これによって、教職員と学生との視点の共有、本大学での取り組みの共有が行え、来年度のファシリテーション業務に活かされるものと思われる。また、これらの取り組みの成果として、個々の学生ファシリテーターが、将来「優れたリーダーシップを持つ学生」として成長するためにプラスになるものと思われる。

⑩ 3月 他のAP採択校への訪問とのシンポジウムの共同開催

本学のAPの取組が自律学修マインドの育成にあるに対し、徳山大学の取組が、講義のアクティブ・ラーニング度のループリックによる評価に重きがある。両校の取組は、言わばアクティブ・ラーニングの入口と出口に相当するものである。そこで、29年3月23日に、AP中間報告会を兼ねたシンポジウムを両校の共催で開催し、AP事業の推進を図った。その中で、本学においてもループリックによる評価を取り入れる検討を行い、ループリックとは形式は異なるが、SOJOポートフォリオを導入することが決定し、平成30年度からの試行を行う。

上記の成果を、数値目標との関連で下記にまとめた。

崇城大学 大学教育再生加速プログラム数値目標のまとめ

	H25	H26	H27	H28	H29	H31(目標値)
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目の割合(科目数で算定)	8.2%(導入科目数75/総科目数915)	12.2%(112/915)	18%(165/915)	20%(178/915)	21%(188/915)	25%(229/915) (15%)
今回の事業により導入するアクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目の割合	53%(40科目/75科目)	60%	59%(97/165)	61%(109/178)	63%(119/188)	70%(70%)
学生一人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	0.87科目(延べ2848人/在籍者数3266人)	1.5科目		3.7科目(延べ13140人/在籍者数3569人)	4.0科目(延べ14198人/在籍者数3586人)	2.2科目(延べ7700人/3500人)(2.2科目)
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合(卒研は除く)	48.2% 1182人/2453人(1~3年(葉は5年))	58.7% 1518人/2586人	79.1% 2155人/2725人	92.9% 2545人/2739人	95.3% 2602人/2729人	100%(100%)
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数	64人/総教員数247人	89人	103人	132人	158人	150人/総数250人(100人)
学生一人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間	約2時間/週	2.3時間/週		5.0時間/週(生命1・2年) (情報1・2年)		約4時間/週(4時間/週)
ファカルティデベロッパース数	0人	16名	16名	17人(総合教育3名+学科14名)	18人(総合教育4名+学科14名)	23人(11人)
アクティブ・ラーニングに関するFD受講者数	0人	延べ39人	延べ158人	120人(実数)	167人(実数)	23人(20人)
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数	約200人/3266人[(約5人/1学科・1学年)×(10学科・4学年)]	289人		911人	899人	900人(400人)
学生ファシリテーター養成数	0人	17人	19人	38人	41人	
留学ファシリテーター養成数	0人	5人	6人	12人	12人	
全学・学科SALC利用者数	0人	76人	1119人	1832人	1789人	
全学・学科SALCでの自律学修時間	0時間	延べ111時間	延べ560時間	延べ1643時間	延べ1674時間	
図書館利用者数	延べ104202人	延べ105418人	延べ121806人	延べ139830人	延べ128977人	
図書館利用者の内、講義に関する資料の利用目的		約21%		約21%	約36%	
図書館利用時間 0~30分		24.4%	23.6%	33.8%	28.0%	
図書館利用時間 30~60分		14.9%	14.8%	16.7%	15.2%	
図書館利用時間 60~90分		17.9%	17.5%	12.7%	14.4%	
図書館利用時間 90~120分		18.8%	22.3%	20.2%	23.5%	
図書館利用時間 120分以上		24.0%	21.7%	18.6%	18.9%	

2018年2月末 (当初目標値)

崇城大学 (取組期間：平成26年度～平成30年度) テーマ名：テーマI (アクティブ・ラーニング)

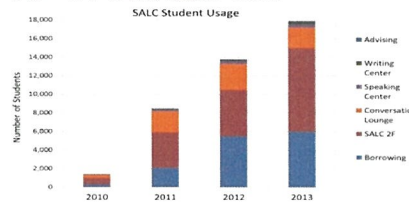


事業の概要・目的

(大学の課題)

地域に根差してグローバルに活躍できる技術者・主体的に行動できる社会人の育成

本学では、「社会を真に教えるには、たとえ一隅といえども、社会を変革し続ける能力を持つ人材の育成が急務である」と考え、平成25年度より中長期計画として、(1)グローバル時代に対応する社会人基礎力の養成、(2)イノベーション・発明発見能力の醸成、(3)起業家精神の陶冶、なる3大方針に基づいて、教育改革を行っている。特に(1)については、すでに平成22年度より、グローバルに活躍できる技術者育成を目指して、英語教育の抜本的見直しを行い、15名に及ぶネイティブの教員によるSILC(Sojo International Learning Center)を立ち上げ、講義はすべて英語で行うコミュニケーション重視の英語教育を行ってきた。また同時にアクティブ・ラーニングのためのSALC(Self-Access Learning Center)の施設も設置し、専任教員を配置して、独自の英語教育の自律学修プログラムを構築してきた。SALCは、開設当初こそ年間の述べ利用者が約1,500人(全学学生数約3,500人)であったが、開設4年目の昨年度は、年間約18,000人にまで増大し(下図参照)、本学学生の自律学修マインドの育成に貢献してきた。



(課題解決のための取組)

本事業では、このSALCで培ったノウハウを全学の専門科目等に波及させる。これによって、本学における教育の多くがアクティブ・ラーニングの要素を取り入れることが可能になり、学生の主体的学びの促進、学修時間の確保につながることを期待される。そのために、本学アクティブ・ラーニングの拠点となる全学SALC及び学科SALCを設置する。また、これらのSALCにおいて、個々の学生の自律学修を促すファカルティ・デベロップャー(FDer)と学生ファシリテーターの育成を目指す。さらに学生証をICカード化し、図書館の入退館システムと連動させて、学生の自律学修時間を把握し、単位の実質化をはかる。本事業においては、上記、中長期計画の3大方針の(1)グローバル技術者育成をさらに加速し、(2)(3)の基礎となる学生の主体的学びのマインドを醸成し、アクティブ・ラーニングを普及させることを事業目的とする。

人材育成の取組

(養成する人材像・具体的な達成目標)

- 授業で出された課題に対し、積極的にFDerや学生ファシリテーターに相談し、図書館や全学SALC/学科SALCを利用して取り組む。
- FDerが開発したICTを活用したアクティビティに対し、自宅などで積極的に取り組む。

(取組内容)

- 総合教育を含めた全学科にSALCを設置し、学生の自律学修を支援するとともに、アクティブ・ラーニングを行える環境を整備する。
- FDerに、SILC/SALCで培った「学習アドバイジングスキル」を養成会で身に付けさせ、学生の主体性を引き出す学修支援を全学SALC/学科SALCでできるようにする。
- FDerを中心に、ICTを活用して、自宅で自律学修が可能なアクティビティを開発し、アクティブ・ラーニングを促す。アクティビティの成果は成績に反映させる。

- 事例1(建築学科「地域計画設計/建築計画コース」(JABEE認定)必修2単位)

「新価値創造型のアクティブラーニングの実践」

全学SALCを利用して、建築学科の3年生約20名を対象に実施。課題対象地域の住民と関わりながら、グループでの計画立案作業を通して、対話と協議によるプロジェクト推進能力の養成など、優れたリーダーシップを持つ学生の養成数10名。

- 事例2(専門基礎科目1年次「微分積分学Ⅰ」/工学部・生物生命学部 必修3単位/情報学部 選択3単位)

「LMSデジタルによる授業時間外演習」

SILC/SALCのアクティビティのノウハウを参考に、1年生の履修者600名強に対しLMS(WebClass)に配置した大量の数学演習問題に取り組ませ(H2Gに少数対象で試行済)。また習熟度別クラスの枠を超えた学生ペア間にて問題解答についての相談を行わせる予定。

- 事例3(正課外 週1回)

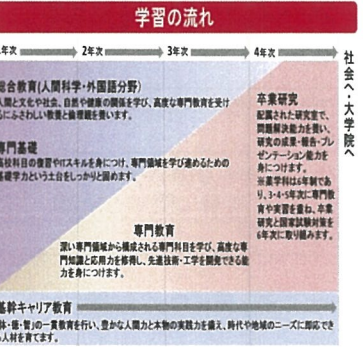
「発展的数学学習の場の構築」

数学に関する学習アドバイスを経て、大学院入試数学系科目対策を想定する、もしくは教養を深めるための発展的数学の学習をそれぞれ異なる時期に開始した、学科・学年が異なる学生7名を集めた。4年生2名を指導側に置き、残り5名に対する学習アドバイスや数学の演習への指導を行うことが可能な場を全学SALCに構築した。



(卒業後の学生のイメージ)

- ① 社会の多種多様な課題に対して、主体的に向き合える社会人。
- ② 自分の与えられた仕事の中で、課題を自ら発見し、業務を改善できる社会人。
- ③ 自分の仕事をグローバルな視点から展開する姿勢と力を持った社会人。



(崇城大学の特徴)

本学は、創立以来、約65年間に渡って、「体・徳・智」という理念の下、科学技術を通じて地域社会に貢献する人材を育成してきた。平成12年芸術学部の新設に併せて、校名を熊本工業大学から崇城大学へ変更し、さらに平成17年薬学部を開設して、5学部体制となって現在に至っている。また、全学科から大学院進学への道が開かれている。

一方、平成5年から始まった18歳人口の減少や、日本社会の環境の変化の中で、様々な改革を行い平成23年の「崇城大学教育刷新プロジェクト」や、平成25年の「崇城大学中長期計画」に結実している。

本学は、これまで一貫して、「学生一人一人の個性を活かしながら、学生の夢を育てる教育」を行い、グローバルに活躍できる技術者の育成を目指している。

具体的な実施計画における指標	25年度	28年度(予定)	30年度(目標値)
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目の割合(%)	8.2%	12%	15%
アクティブ・ラーニングを導入した科目内の、必修科目の割合	53%	60%	70%
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合(卒研は除く)	48.2%	58.7%	100%
学生一人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	0.87科目	1.0科目	2.0科目
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数(約250人中)	64人	80人	100人
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間	2時間/週	3時間/週	4時間/週
学生の自律学修を支援するファカルティ・デベロップャー数	0人	11人	11人
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(約3500人中)	約200人	約320人	約400人

数学に関する学習アドバイスを受けて



崇城大学
情報学部情報学科 3年次
氏名 三浦彩夏

1年生の頃に電磁気学で学んだ複素関数について自分でもう一度学んでみようと思ったのですが、どのような教科書を選んだらよいかと迷っていたため数学について学習アドバイスを受けました。教科書を決めたあと週1回定期的に相談をして、わからない所が残らないようになっています。これからの学習目標を少しづつですが自分で立てる事ができるようになり、嬉しく思っています。

Ⅱ－２．全学のアクティブ・ラーニング取り組み調査結果

各学科のアクティブラーニング実施状況調査（平成29年度）

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数（0でも結構です）

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の見方プロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
総合教育	①基礎物理学・学科により必修もしくは選択・上野賢仁 天本徳浩・180・1 ②物理学・学科により必修もしくは選択・上野賢仁 天本徳浩・180・1 ③物理学実験・学科により必修もしくは選択・町田光男 上野賢仁 天本徳浩 永野利徳・220・0	④ベンチャー起業論I・選択・中島厚秀・1年・440・20 ⑤キャリア基礎I・必修・辻田祐純 藤本元啓・1年・630・120 ⑥キャリア基礎II・必修・辻田祐純 藤本元啓・1年・630・120 ⑦キャリア基礎III・必修・辻田祐純・3年・600・30 ⑧キャリア実践I(3機)・必修・辻田祐純・3年・70・0 ⑨キャリア実践II(3機)・必修・辻田祐純・3年・70・0 ⑩キャリアデザインII(3美デ)・必修・辻田祐純・3年・55・0 ⑪英語1/⑫英語2・SILC教員・1年・全学年800人・0 ⑬英語3/⑭英語4・SILC教員・2年・全学年800人・0	⑮ベンチャー起業論II・選択・中島厚秀・1年・150人・20人 ⑯イノベーション論I・選択・中島厚秀・2年・40人・10人

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
機械工学科	①機械製図応用・必修・片山、里永、内田、河瀬、生田・2年・85・20(各班1名程度) ②機械設計製図・選択必修・森、渡邊・3年・41名・不明 ③生産システム・選択・里永・3年・47名・10名(各班1名程度) ④機械工学実験・演習・必修・森、小野、片山、齊藤、平、河瀬・3年・78名・6～12名(各班1～2名程度)	⑤ロボット製作・選択・平、森、内田、渡邊、山澤、前田、生田・1年・79名・20名(各班1名程度) ⑥フレッシュマンセミナー・選択・齊藤、小野、片山、内田、劉、北田、渡邊・1年・79名・不明 ⑦機械製作実習・選択・内田、森、山澤、前田、河瀬、生田・3年・37名・11名 ⑧機械工学実験・演習【同左④】・必修・森、小野、片山、齊藤、平、河瀬・3年・78名・6～12名(各班1～2名程度) ⑨機械図面と加工・選択必修・里永、山澤、前田、河瀬、(生田)・3年・40名・10名(各班1名程度)	⑩機械製作実習【同左⑦】・選択・内田、森、山澤、前田、河瀬、生田・3年・37名・11名 ⑪学生フォーミュラ・課外活動・生田、内田・1～4年・10～20名・1～3名程度 ⑫ロボット研究会・課外活動・平、森、河瀬・機械、情報1～4年・27名・3名程度

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
ナノサイエンス学科	①分析化学実験(必修・西田正志・池永和敏・1年・60名・10名) ②環境生物科学実験(必修・迫口明浩・田丸俊一・櫻木美菜・1年・60名・10名) ③環境物質科学実験(必修・池永和敏・西田正志・1年・60名・10名) ④素材科学実験I(必修・友重竜一・井野川人姿・2年・60名・10名) ⑤素材科学実験II(必修・八田泰三・水城圭司・2年・60名・10名) ⑥素材科学実験III(必修・黒岩敬太・米村弘明・2年・60名・10名) ⑦生化学実験(必修・田丸俊一・3年・60名・10名) ⑧プロセス工学実験(必修・草壁克己・迫口明浩・櫻木美菜・3年・60名・10名) ⑨化学II演習(必修・八田泰三・迫口明浩・友重竜一・米村弘明1年・60名・10名)) ⑨機能性高分子科学(選択・黒岩敬太・3年生・50名・3名) ⑩材料組織学(選択・友重竜一・2年生・30名・2名) ⑪無機材料科学(選択・友重竜一・3年生・20名・1名)	⑫化学II(必修・友重竜一担当部分)・1年・60名・10名) ⑬化学II演習(必修・八田泰三・迫口明浩・友重竜一・米村弘明・1年・60名・10名) ⑭素材科学実験I(必修・友重竜一・井野川人姿・2年・60名・10名) ⑮素材科学実験III(必修・黒岩敬太・米村弘明・2年・60名・10名) ⑯環境物質科学(選択・池永和敏・2年・60名・10名) ⑰産業と生活環境科学(選択・池永和敏・2年・60名・10名) ⑱生化学実験(必修・田丸俊一・3年・60名・10名) ⑲学外実習(必修・櫻木・黒岩・3年・50名・10名) ⑳ナノサイエンス入門(必修・全員・1年・60名・10名) ㉑技術者の基礎知識(必修・土橋和之・3年・60名・10名) ㉒特別活動IV(選択・草壁・3年・50名・10名) ㉓ナノサイエンス演習(必修・ナノサイエンス学科教員12名(3年・60名・10名) ㉔材料組織学(選択・友重竜一・2年生・30名・2名) ㉕無機材料科学(選択・友重竜一・3年生・20名・1名)	㉖ナノサイエンス演習(必修・ナノサイエンス学科教員12名(3年・60名・10名) ㉗化学II演習(必修・八田泰三・迫口明浩・友重竜一・米村弘明・1年・60名・10名) ㉘専門英語I(選択・草壁克己・3年・60名・10名) ㉙学外実習(必修・櫻木・黒岩・3年・50名・10名) ㉚特別活動IV(選択・草壁克己・3年・50名・10名)

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の見方、考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
建築学科	<p>①【科目名】アーキワークⅠ 【必修選択】必修 【教員名】村田、中園、内丸、東、林、島津 【学年】1年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>②【科目名】アーキワークⅡ 【必修選択】必修 【教員名】村田、西郷、本保、東、林、島津 【学年】1年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>③【科目名】アーキワークⅢ 【必修選択】必修 【教員名】秋元、村田、林、島津、松茂良、原田、谷川 【学年】2年 【受講人数】90名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>④【科目名】アーキワークⅣ 【必修選択】必修 【教員名】内丸、村上、林、島津、松茂良、谷川 【学年】2年 【受講人数】90名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p>	<p>⑦【科目名】建築設計Ⅰ 【必修選択】必修 【教員名】秋元、本保、中村 【学年】1年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑧【科目名】建築設計Ⅱ 【必修選択】必修 【教員名】秋元、西郷、本保 【学年】1年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑨【科目名】建築設計Ⅲ 【必修選択】必修 【教員名】西郷、内丸、本保、村上、村田、東、島津 【学年】2年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑩【科目名】建築設計Ⅳ 【必修選択】必修 【教員名】本保、中園、西山 【学年】2年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑪【科目名】建築意匠設計 【必修選択】選択(建築計画コース選択必修) 【教員名】中園 【学年】3年 【受講人数】20名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】10名</p> <p>⑫【科目名】建築設備設計 【必修選択】選択(建築計画コース選択必修) 【教員名】村田、木村 【学年】3年 【受講人数】20名</p>	<p>⑩【科目名】地域計画設計 【必修選択】選択(建築計画コース必修) 【教員名】内丸 【学年】3年 【受講人数】20名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】10名</p>

建築学科	<p>⑤【科目名】建築史Ⅰ 【必修選択】必修 【教員名】内丸、原田 【学年】2年 【受講人数】90名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑥【科目名】建築史Ⅱ 【必修選択】必修 【教員名】内丸 【学年】2年 【受講人数】90名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p>	<p>⑬【科目名】建築構造設計 【必修選択】選択(建築構造コース必修) 【教員名】林、川島 【学年】3年 【受講人数】20名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑭【科目名】デザイン実習Ⅰ 【必修選択】選択 【教員名】星加 【学年】1年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑮【科目名】デザイン実習Ⅱ 【必修選択】選択 【教員名】星加 【学年】1年 【受講人数】80名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑯【科目名】デザイン実習Ⅲ 【必修選択】選択 【教員名】中園 【学年】2年 【受講人数】20名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】10名</p> <p>⑰【科目名】建築構造実験 【必修選択】必修 【教員名】林、島津、松茂良、谷川 【学年】2年 【受講人数】20名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】10名</p>	

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
宇宙航空システム工学科	①専門英語Ⅰ(整備学) ／選択／麻田／2年／ 28名／0名 ②専門英語Ⅱ(整備学) ／選択／麻田／2年／ 28名／0名	③航空宇宙工学・演習Ⅰ: 選択、小林健児、千馬浩充・1年・35人・0 ④航空宇宙工学・演習Ⅱ: 選択、小林健児、千馬浩充・2年・50人・0 ⑤航空宇宙工学・演習Ⅲ: 選択、小林健児、千馬浩充・3年・4人・0 ・宇宙推進工学: 選択、小林健児・3年・21人・0 ⑥航空電子装備品(2整)/選択/麻田/2年/27名/0名 ⑦航空機性能運動実習Ⅱ(整備学): 選択 橋本(昇)宮元/2年/24名/0名	⑧誘導制御Ⅰ 選択 橋本毅・2年 25名/0

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
情報学科	①ものづくり教室／選択／青木、柿木、吉岡／1年／60名／5名／ ②電子情報基礎実験／選択／杉浦、宗像、平湯／2年／47名／12名／ ③情報通信実験／選択／山路、吉岡、平湯／3年／36名／6名／ ④情報処理基礎A／選択／齋藤／1年／83名／0名／ ⑤情報処理基礎B／選択／齋藤／1年／79名／0名／	⑥電磁気学／必修／宗像／2年／35名／10名／ ⑦メディアコンテンツ制作入門／選択／星合、植村、非常勤講師3名／2年／46名／6名／ ⑧ヒューマンインタフェース概論／選択／木村／3年／60名／6名／	⑨ソフトウェアエンジニアリング入門／選択／星合／2年／100名／10名／ ⑩メディアコンテンツ制作演習／選択／星合、植村、非常勤講師3名／2年／50名／5名／ ⑪制御工学Ⅱ／選択／アハリ・アレリザ／3年／2名／1名／ ⑫マイコンプログラミング演習Ⅱ／選択／西／3年／15名／3名／

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
応用微生物工学科	①「応用微生物学実験」(必修)(原島、岡、浴野)(1-2年)(80名)(10名) ②「生物化学実験」(必修)(安藤、松元)(2年)(80名)(10名) ③「食品生物学実験」(必修)(寺本、三枝)(3年)(80名)(10名) ④「生物資源環境工学実験」(必修)、(松岡、長濱、中山)(3年)(80名)(10名) ⑤「微生物遺伝学実験」(必修)(田口、笹野)(2年)(80名)(10名) ⑥「分析化学実験」(必修)(山田、西園)(1年)(80名)(10名) ⑦「化学I」(必修)(中山)(1年)(80名)(10名) ⑧「特別活動I」(選択)(浴野)(3年)(80名)(10名)	⑨「環境保全工学」(選択)(長濱)(2年)(68名)(10名) ⑩「食品分析学」(選択)(山田)(3年)(40名)(0名) ⑪「食品生物学実験」(必修)(寺本、三枝)(3年)(80名)(10名) ⑫「化学工学」(選択)(長濱)(2年27名)(10名)	

応用生命科学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
応用生命科学科	<p>①科目:生化学Ⅱ(前期) 必修選択:必修科目 教員名:武谷浩之 学年:2年、受講人数:85名 授業内容:半反転授業</p> <p>②科目:分子生物学(前期) 必修選択:必修科目 教員名:武谷浩之 学年:2年、受講人数:85名 授業内容:半反転授業</p> <p>③科目:遺伝子科学(後期) 必修選択:選択科目 教員名:武谷浩之 学年:2年、受講人数:60名 授業内容:半反転授業</p> <p>④生命情報科学実験I ・必修科目・教員名:進、齋田、武谷、千々岩、宮原・学年:2年生・受講人数:8人の12グループ・リーダーシップ:12名(グループ1名)</p> <p>⑤生命情報科学実験II ・必修科目・教員名:進、齋田、武谷、千々岩、宮原・学年:3年生・受講人数:8,9人の12グループ・リーダーシップ:12名(グループ1名)</p> <p>⑥医用生体工学実験 ・必修科目・教員名:松本、松下、後藤、市原、古水・学年:3年生・受講人数:6,7人の16グループ・リーダーシップ:32名(グループ2名)</p> <p>⑦生命環境科学実験 ・必修科目・教員名:千々岩、西山孝、平大輔・学年:3年生・受講人数:8,9人グループ×12 ・リーダーシップ:0名</p> <p>⑧細胞工学実験 ・必修科目・教員名:宮坂均、山本進二郎、林修平・学年:3年生・授業人数:84名前後・リーダーシップ:0</p> <p>⑨基礎生命科学Ⅰ(有機化学) ・必修科目 ・教員名:古水 ・学年:1年、授業人数:70名 ・リーダー0名</p>	<p>⑩科目:生理活性物質 必修選択の区分:選択科目 教員名:齋田哲也 学年:3年 受講人数:15名 優れたリーダー:3 授業内容:PBL</p> <p>⑪科目:自然共生人類学 必修選択の区分:選択科目 教員名:松下、古水 学年:1年 受講人数:90名 リーダーシップ:21名</p>	

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ること、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
美術学科		<p>美術学科の実習科目は学生同士というのではなく学生自身が出された課題を学生個人で主体的に制作していく。理論系の科目も基本学生個人主体によるもの。(H25年度と同様)</p> <p>H29年度実施 1年(選択必修) ①-②日本画実習 I A・B 中村・佐藤・稲葉(非):各11人 ③-④ 洋画実習 I A・B有田・熊谷・下城(非) 各13人 ⑤-⑥ 彫刻実習 I A・B楠元: 8人、 ⑦-⑧ 美術史基礎演習 I - II 関根・永田:2人 2年 ⑨-⑩ 日本画実習 II A・B 中村・佐藤:各人 ⑪-⑫ 洋画実習 II A・B有田・熊谷・下城(非):各人 ⑬-⑭ 彫刻実習 II A・B楠元: 各3人、 ⑮-⑯ 芸術学演習 I - II 関根・永田: 5人、 ⑰-⑱ デザイン表現演習 I - II 三枝・永田: 2人、 ⑲-⑳ 西洋美術史特論 I - II 関根人、 ㉑-㉒ 日本・東洋美術史特論 I 永田:2人 ㉓ 視覚造形実習 I - II 永田・三枝・飯田・甲野・野島(泉)・野島(マ)4人 3年 ㉔-㉕ 日本画実習 III-IV A・B 中村・佐藤: 人 ㉖-㉗ 洋画実習 III-IV A・B有田・熊谷: 24人 ㉘-㉙ 彫刻実習 III-IV A・B勝野: 人、 ㉚-㉛ 西洋美術史特論 III-IV 関根: 2人、 ㉜ 特別演習(芸文)関根・永田: 1人 ㉝ 視覚造形実習 III-IV 永田、野島(マ)、野島(泉): 4人</p>	<p>美術学科展は学生が主導的に実施し、協働作業で展示を行い、展覧会を実現する上ではこのタイプに属するものであろう。(毎年、前期中に開催)</p> <p>H29年度実施 1~4年(全学年美術学科全員) ・各コースの学科展(9~10月開催)、学科行事 3年必修科目 ㉞ 学外演習(視覚芸術) 2人 【* プラザ図書館における「よしみち展」2016・11・19-11・27】 3年選択必修科目(芸術文化コース) ㉟ ワークショップ演習(通年) 永田:6人</p>

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
デザイン学科		1年 ①■コミュニケーションデザイン論演習 森野・甲野 40人 選択 ②■コンピュータ基礎実習 坂井 40人 選択 ③■造形基礎実習 本間・飯田 40人 必修 ④■デジタルデザイン基礎演習 甲野 40人 選択 ⑤■表現基礎実習 森野・甲野 40人 必修 ⑥■映像表現論演習 坂井 40人 選択	すべて必修 ⑳■デザイン基礎実習Ⅰ1年40人、 ㉑■デザイン基礎実習Ⅱ1年40人、 ㉒■プロジェクト実習Ⅰ2年生35人、 ㉓■プロジェクト実習Ⅱ2年生35人、 ㉔■デザイン総合演習Ⅰ3年生35人 ㉕■デザイン総合演習Ⅱ3年生35人 デザイン学科教員全員8人各プロジェクトでリーダー、副リーダーでプロジェクトを進めていく。8プロジェクトでリーダー育成8人、副リーダー育成8人
		2年 ㉖■デザイン発想論演習 本間 35人 選択 ㉗■生活環境デザイン実習Ⅰ 本間・飯田 6人 選択 ㉘■グラフィックデザイン実習 森野・甲野・岩上 20人 選択 ㉙■生活環境デザイン実習Ⅱ 原田・本間 6人 選択 ㉚■メディアデザイン実習 甲野 20人 選択 ㉛■情報デザイン論演習 森野 20人 選択 ㉜■メディアデザイン実習 甲野 20人 選択 ㉝■造形材料論演習 飯田 6人 選択 ㉞■色彩論演習 甲野 20人 選択 ㉟■デザインビジネス論演習 飯田・岩上 20人 選択 ㊱■マンガ表現演習Ⅰ 岩田 20人 選択 ㊲■マンガ表現演習Ⅱ 岩田 20人 選択	

デザイン学科

3年

- ⑱■空間デザイン実習
原田 8人 選択
- ⑳■コンテンツ制作実習
坂井 20人 選択
- ㉑■総合造形実習
三枝 20人 選択
- ㉒■プロダクトデザイン実習 I
本間・飯田 9人 選択
- ㉓■広告デザイン実習
森野・甲野・岩上 20人 選択
- ㉔■アートクリエイション実習
三枝 10人 選択
- ㉕■環境デザイン実習
原田 8人 選択
- ㉖■クロスメディア総合実習
森野 10人 選択
- ㉗■イラストレーション実習
小川 20人 選択
- ㉘■プロダクトデザイン実習 II
飯田・本間 9人 選択
- ㉙■マンガ表現演習Ⅲ
岩田 20人 選択
- ㉚■マンガ表現演習Ⅳ
岩田 20人 選択
- ㉛■デザインストラテジー
森野 20人 選択

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(平成29年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作って「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。	②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。	③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。
薬学科	<p>①【科目名】 実務実習事前学習(I) 【必修選択】 必修 【教員】 靄田 聡 【学年】 4年 【受講人数】 126名 【リーダー】 0</p> <p>②【科目名】 実務実習事前学習(4月～5月前半) 【必修選択】 必修 【教員】 靄田 聡・石黒 貴子 【学年】 5年 【受講人数】 138名 【リーダー】 0</p> <p>③【科目名】 物理化学Ⅱ 【必修選択】 必修 【教員】 宮本 秀一 【学年】 2年 【受講人数】 139名 【リーダー】 0</p> <p>④【科目名】 物理化学Ⅲ 【必修選択】 必修 【教員】 宮本 秀一 【学年】 2年 【受講人数】 139名 【リーダー】 0</p>	<p>⑤【科目名】 生命倫理学 【必修選択】 必修 【教員】 中嶋 弥穂子・松倉 誠 【学年】 1年 【受講人数】 146名 【リーダー】 0</p> <p>⑥【科目名】 医薬倫理学 【必修選択】 必修 【教員】 瀬尾 量・松倉 誠 【学年】 4年 【受講人数】 126名 【リーダー】 0</p> <p>⑦【科目名】 実務実習事前学習(I) 【必修選択】 必修 【教員】 靄田 聡 【学年】 4年 【受講人数】 126名 【リーダー】 0</p> <p>⑧【科目名】 実務実習事前学習(Ⅱ) 【必修選択】 必修 【教員】 靄田 聡・瀬尾 量・松倉 誠・中嶋 弥穂子・山崎 啓之・藤井 績・石黒 貴子・田口 和明・堀尾 福子 【学年】 4年 【受講人数】 126名 【リーダー】 0</p> <p>⑨【科目名】 実務実習事前学習(4月～5月前半) 【必修選択】 必修 【教員】 靄田 聡・石黒 貴子 【学年】 5年 【受講人数】 138名 【リーダー】 0</p>	

Ⅱ－3. 29年度の全学SALC・学科SALCでの学修指導の時間割表

全学SALC・学科SALCでの学修指導の時間割表（担当の先生および実施場所） 平成29年度前期

※下級生や他の学生からの学びに関する相談、質問に対応いたします。ぜひ、ご利用ください。

FC：ファシリテーター

	月	火	水	木	金
1限					
2限			情報SALC [F603] ：学生FC		
昼休み	デザインSALC [D406] ：飯田先生・学生FC		空港SALC [教室4] ：留学FC・学生FC	空港SALC [教室4] ：留学FC	空港SALC [教室4] ：留学FC
3限	情報SALC [F603] ：学生FC		デザインSALC [D308] ：学生FC		情報SALC [F603] ：学生FC
4限	全学SALC (数学) 【図書館1階】 ：学生FC	空港SALC [教室4] ：麻田先生 デザインSALC [D308] ：学生FC 情報SALC [F603] ：学生FC ナノSALC [N405] ：池永先生・学生FC (2, 3年対象)			
5限	生命SALC [G315] ：齋田先生・学生FC 機械SALC [I630] ：吉良先生・学生FC 応微SALC [H-4階] 【室】 ：中山先生・学生FC 全学SALC (数学) 【図書館1階】 ：大嶋先生・学生FC 情報SALC [F603] ：学生FC 建築SALC [K101] ：西郷先生・学生FC	空港SALC [教室4] ：麻田先生・学生FC 全学SALC (物理) 【図書館1階】 ：天本先生	空港SALC [教室4] ：千馬先生 薬学SALC [ANEX1階] ：学生FC 美術SALC [A206] ：学生FC ナノSALC [N405] ：学生FC (全学年対象)	空港SALC [教室4] ：学生FC 情報SALC [F603] ：木村先生・学生FC 薬学SALC [ANEX1階] ：國安先生 生命SALC [G315] ：進先生・学生FC	生命SALC [G315] ：学生FC 薬学SALC [ANEX1階] ：学生FC 機械SALC [I630] ：吉良先生・学生FC 全学SALC (物理) 【図書館1階】 ：上野先生 情報SALC [F603] ：学生FC

崇城大学教育再生加速プログラム（AP）事業

ファカルティ・ディベロッパー



F D e r 錬成会 第15回

テーマ：「学習アドバイジングスキルを身に付ける」

日時：2017年4月20日（木）16時40分～18時10分

場所：M303 対象：教員

ファシリテーション：本田先生（機LV）

話題提供：薬学 國安教授、機械 吉良教授

学習アドバイジングスキルの講習を受講された先生方から、学生の自律学修マインド育成のためのノウハウを提供いただきます。

AP事業で整備している学科SALC（自律学修室）を如何に活用し、学生の自律学修を促すための仕組みづくりについて先生方で意見交換を行い、情報共有していただきます。皆様、奮ってご参加ください。



錬成会（SALC ネットの会と同時開催）参加状況
担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）

崇城大学教育再生加速プログラム（AP）事業



第1回FD講演会 第16回 錬成会

テーマ:「各学科 SALC アクティビティーの紹介」

日時:2017年5月26日(金)16時40分~18時10分

場所:本館6階学術講演会室 対象:教員

話題提供:宝来先生(SILC/SALC)、大嶋先生(総合教育)、
麻田先生(宇宙)、齋田先生(生命)

現在、全学 SALC 学科 SALC の利用促進、授業外学修時間の確保のために、各 FDer の先生方に学科 SALC アクティビティーの作成をお願いしています。今回は、現在、授業の中で活用されている SALC アクティビティーの例をご紹介いただき、皆様で情報共有したいと思います。皆様、奮ってご参加ください。 ↓錬成会参加状況↓



担当:教務課 (内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)

崇城大学教育再生加速プログラム（AP）事業



ファカルティ・ディベロッパー

第17回 F D e r 錬成会 SALCネットの会

テーマ:「神田外語大学の巨大 SALC—KUIS8 とは—」

日時:2017年10月30日(月)16時40分～18時10分

場所:M306 対象:教職員

ファシリテーション:本田先生(機LV)

話題提供:松下先生(副学長)、中山先生(応徹)、宝来先生(SILC)

本学の SILC/SALC は、神田外語大学との連携で開設されました。その神田外語大学が創立30周年を記念して、巨大 SALC を建設しました。その SALC での学びを紹介します。



担当:教務課 (内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)

崇城大学教育再生加速プログラム (AP) 事業



ファカルティ・ディベロッパー

第18回 F D e r 錬成会 SALCネットの会

テーマ:「全学SALC・学科SALCの活動状況報告」

日時:2017年11月17日(金)16時40分~18時10分

場所:図書館1階全学SALC(青) 対象:教職員、FC

ファシリテーション:本田先生(機LV)

話題提供:上野先生(総合・物理)、齋田先生、進先生(生命)

今回の SALC ネットの会は、全学 SALC と学科 SALC の活動状況報告です。●各学科 SALC 等の利用状況の情報共有、●利用促進のための改善案の提案、●学科 SALC 活動の学内への周知とネットの拡大、●後輩のファシリテーター育成への協力 を目的として報告と提案を元に、参加者全員でグループ討論を行います。皆様、奮ってご参加ください。



担当:教務課 (内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)

崇城大学教育再生加速プログラム（AP）事業



ファカルティ・ディベロッパー

第19回 F D e r 錬成会 SALCネットの会

テーマ:「学科SALCの活動状況報告」

日時:2017年12月1日(金)16時40分～18時10分

場所:図書館1階全学SALC(青) 対象:教職員、FC

ファシリテーション:本田先生(機LV)

話題提供:情報 SALC(FDer 木村先生)、応微 SALC(FDer 中山先生)

今回の SALC ネットの会は、学科 SALC の活動状況報告です。●各学科 SALC 等の利用状況の情報共有、●利用促進のための改善案の提案、●学科 SALC 活動の学内への周知とネットの拡大、●後輩のファシリテーター育成への協力 を目的として報告と提案を元に、参加者全員でグループ討論を行います。皆様、奮ってご参加ください。



担当:教務課 (内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)

崇城大学教育再生加速プログラム（AP）事業



ファカルティ・ディベロッパー

第20回 F D e r 錬成会 SALCネットの会

テーマ：「学科SALCの活動状況報告」

日時：2018年1月26日（金）16時40分～18時10分

場所：図書館1階全学SALC（青） 対象：教職員、FC

ファシリテーション：本田先生（職LV）

話題提供：薬学 SALC（留学ファシリテーター）、空港 SALC

今回の SALC ネットの会は、学科 SALC の活動状況報告です。●各学科 SALC 等の利用状況の情報共有、●利用促進のための改善案の提案、●学科 SALC 活動の学内への周知とネットの拡大、●後輩のファシリテーター育成への協力 を目的として報告と提案を元に、参加者全員でグループ討議を行います。皆様、奮ってご参加ください。



担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）

崇城大学教育再生加速プログラム（AP）事業



ファカルティ・ディベロッパー

第21回 F D e r 錬成会 SALCネットの会

テーマ：「学科SALCの活動状況報告」

日時：2018年2月21日（水）16時40分～18時10分

場所：図書館1階全学SALC（青） 対象：教職員、FC

ファシリテーション：本田先生（機LV）

話題提供：建築 SALC、ナノ SALC

今回の SALC ネットの会は、学科 SALC の活動状況報告です。●各学科 SALC 等の利用状況の
情報共有、●利用促進のための改善案の提案、●学科 SALC 活動の学内への周知とネット
の拡大、●後輩のファシリテーター育成への協力 を目的として報告と提案を元に、参加
者全員でグループ討論を行います。皆様、奮ってご参加ください。



担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）

平成29年度
第2回

崇城大学・熊本保健科学大学 大学間連携事業 FD講演会

LD(学習障害)が教えてくれたこと～寄り添う心の大切さ～

2018年

2月22日 木 14:00-15:30

崇城大学本館6階 【学術講演会室】

「LD(学習障害)が教えて
くれたこと～寄り添う心の大切さ～」

講師：南雲明彦氏

(明達館高等学校/共有コーディネーター)



南雲明彦氏は、ご自身が発達障害の一つである読字障害(ディスレクシア)の方であり、「発達障害から見つけた主体的な学び」をテーマに講演や執筆活動に取り組んでおられます。日本青年会議所が主催する人間力大賞2012において、厚生労働大臣奨励賞を受賞されています。

今回の講演では、学びづらさがある学生へのアクティブ・ラーニング(能動的・主体的学習)を促す寄り添い方についてもお話しいただきます。皆様、奮ってご参加ください!

崇城大学教育再生加速プログラム(AP)事業 タイプI(アクティブ・ラーニング)

お問い合わせ

崇城大学 教務課 TEL:096-326-3406(1132)

MAIL:kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp





崇城大学

大学教育再生加速プログラム(AP) テーマI (アクティブ・ラーニング)

平成29年度

大学教育再生加速プログラム特別講演会
(第3回 FD講演会)

主体的な学びを
醸成するポートフォリオ

PROGRAM

基調講演

岩井 洋 (帝塚山大学)

藤本 元啓 (崇城大学)

パネルディスカッション

指定討論者 田中 岳 (東京工業大学)

コーディネーター 喜久里 要 (早稲田大学)

2018. 3. 26 日 13:30～16:30

会場 崇城大学本館6階 学術講演会室

熊本市西区池田4-22-1 (池田キャンパス)

主催



崇城大学

SOJO UNIVERSITY

お申込みはWebで [URL] <http://ap.ed.sojo-u.ac.jp/event/fdh2903.html>

お問い合わせは 崇城大学教務課 TEL:096-326-3406 FAX:096-326-3000

E-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp

申し込み期限 3月15日 (木)



PROGRAM

- 13:30 開会挨拶 崇城大学学長・理事長 中山峰男
 13:35 挨拶 崇城大学FD委員長 吉良章夫

第1部 基調講演

- 13:40 学びと教育を『見える化』するポートフォリオ～導入から運用上の課題まで～ 帝塚山大学 岩井 洋
 14:40 SOJOポートフォリオシステムの機能と役割～生徒から学生へ、そして社会人へ～ 崇城大学 藤本 元啓

第2部 パネルディスカッション ～主体的な学びの教育的しかけとは～

- 15:35 指定討論者 東京工業大学 田中 岳
 コーディネーター 早稲田大学 喜久里 要
 パネリスト 帝塚山大学 岩井 洋 崇城大学 藤本 元啓
 16:25 閉会挨拶 崇城大学副学長 松下 琢

講師紹介

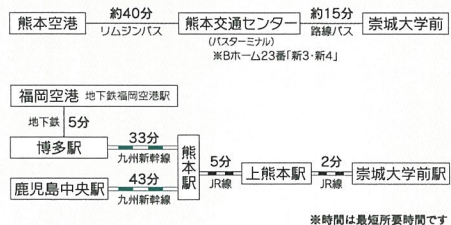
岩井 洋(いらい ひろし) 帝塚山大学 教授
 専門: キャリア教育、宗教社会学、経営人類学
 関西国際大学で学長補佐を務めた後、2012年～17年まで帝塚山大学学長。初年次教育学会理事、日本宗教学会理事、私立大学情報教育協会大学情報システム研究委員会委員長等を歴任。20年来、アクティブラーニングを実践し、ポートフォリオ・システムの開発やキャリア教育にも携わる。著書に『初年次教育: 歴史・理論・実践と世界の動向』『初年次教育の現状と未来』『キャリアデザイン』『アジア企業の経営理念』、論文に『初年次教育におけるポートフォリオの活用とその可能性』ほか。

藤本 元啓(ふじもと もとひろ) 崇城大学 教授
 専門: 初年次教育、日本中世史
 金沢工業大学で修士基礎教育課程主任、学生部長、入試部長を務め、初年次教育、ポートフォリオの運営に携わる。2016年より現職、教育改革本部長、就職部長。大学評価・学位授与機構評価員、日本工学教育協会特別教育士、文部科学省大学設置・学校法人審議会専門委員、私立大学情報教育協会大学情報システム研究委員会委員、初年次教育学会常任理事・事務局長等を歴任、現在同学会会長。著書に『中世熱田社の構造と展開』『初年次教育: 歴史・理論・実践と世界の動向』『初年次教育の現状と未来』『eポートフォリオ』ほか。

田中 岳(たなか かく) 東京工業大学 教授 「本学AP外部評価委員」
 専門: 高等教育マネジメント
 京都精華大学で学生課・入試広報課・教務課を経て「教育推進センター」に勤務し、職員として特色GP採択など学内の大学改革を推進。2008年度から九州大学教育改革企画支援室准教授、基幹教育院教育企画開発部では2014年度から開始の初年次カリキュラム、「基幹教育」の開発・マネジメントを担う。Q-Links(九州地域大学教育改善FD・SDネットワーク)を主宰した。現在東京工業大学教育革新センター副センター長、初年次教育学会理事。論文に「教務系職員に期待されていた新たな業務」ほか。

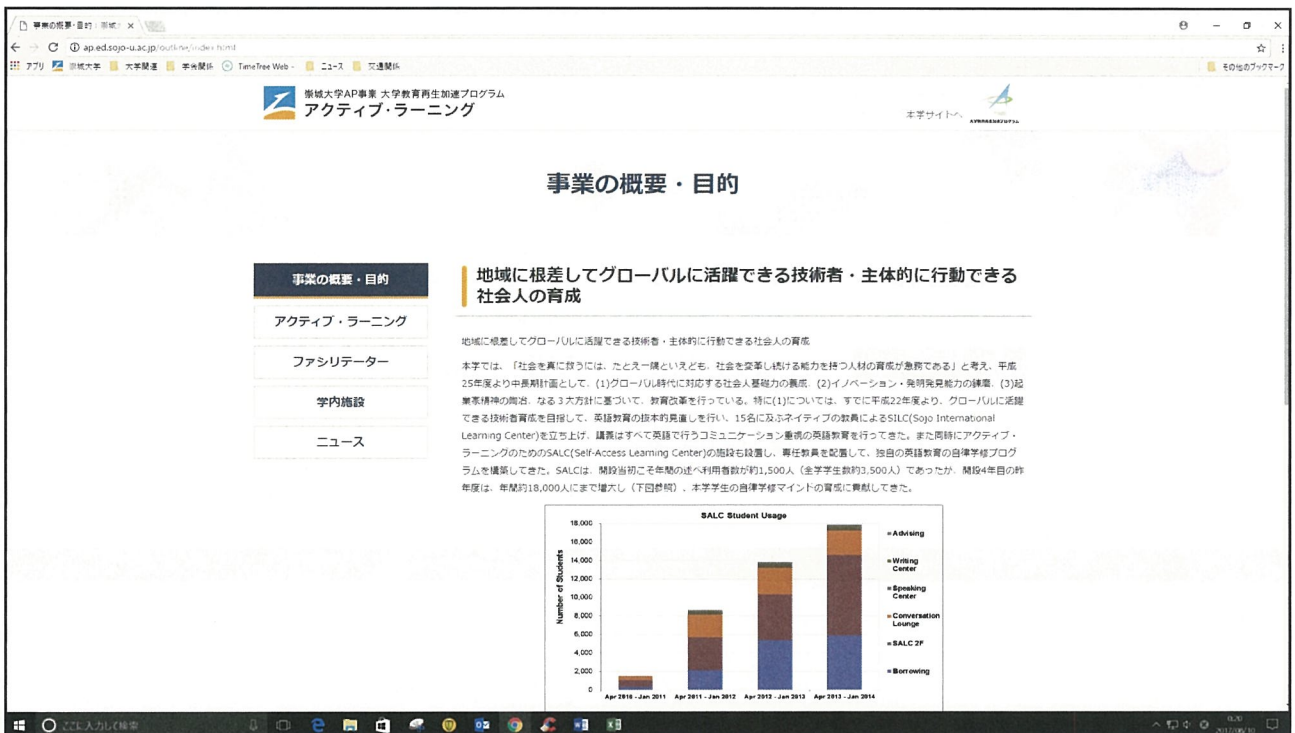
喜久里 要(きくさと かなめ) 早稲田大学
 2003年に文部科学省入省。高等教育局大学振興課、私学助成課で大学行政に6年間携わる。2013年より大阪大学に総長室長として、SGU(スーパーグローバル大学創成支援)など大学改革の企画立案を担当。2015年に高等教育の競争力強化と質の高い教育実現をテーマとし、早稲田大学職員に転身し、現在は研究戦略センターにて、大学の研究力分析、研究者の支援、国際展開の検討等に関わるほか、学会や勉強会、大学での講演活動も精力的に行い、「文部科学教育通信」で「WILLが創る新たな大学の道」を連載中。

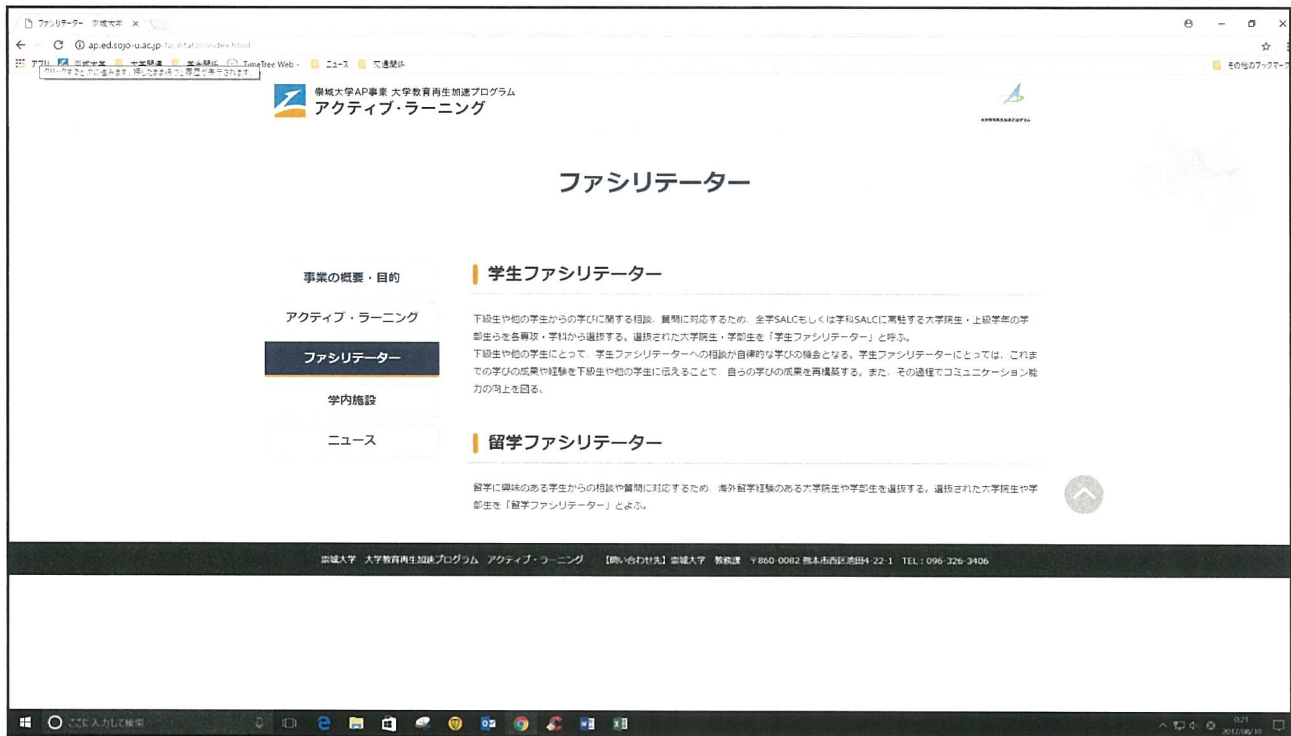
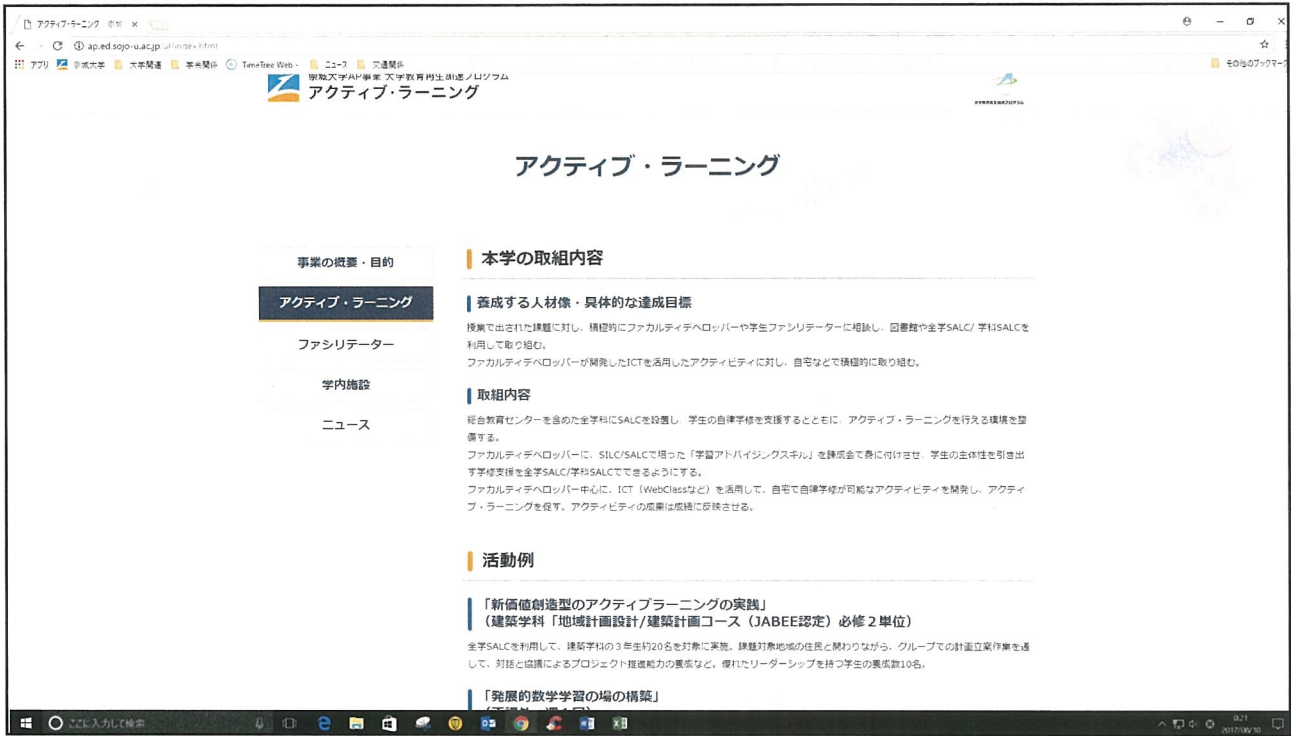
熊本空港・福岡空港・鹿児島中央駅から会場までのACCESS



Ⅱ-7. 29年度の広報活動：大学ホームページへの本AP事業のページ作成

28年度より、大学HPにAP事業のサイトを開設した。 <http://ap.ed.sojo-u.ac.jp/>





学内施設

事業の概要・目的
 アクティブ・ラーニング
 ファシリテーター
学内施設
 ニュース

全学SALC

主に総合教育センター教員担当の授業・実習に関する相談、質問について対応する場所。回遊型1階に、少人数のアクティブ・ラーニング授業にも対応できるよう、電子黒板や可動式机、学内無線LAN等を設置。隣接する場所に、70人以上の授業にも対応できる可動式机とホワイトボードを設置した自習スペースも用意している。



全学SALC・学部SALCの経路図はこちら

学科SALC

各学部の授業・実習・実務・研究に関する相談、質問について対応する場所。各学部の学部生が利用しやすい場所に、順次設置を途

ニュース

事業の概要・目的
 アクティブ・ラーニング
 ファシリテーター
 学内施設
ニュース

2017年度

- 2017/04/17 平成29年度の全学SALC・学科SALCでのFDeRおよび学生FCの開催開始 [\[会場別要約\]](#)
- 2017/04/19 全学SALCにおける数学教育の取組が「教授法が大学を変える 2016年度版」に掲載 [\[教授法が大学を変える 2016年度版\]](#)
- 2017/04/20 第15回FDeR総会にて、学修アドバイザーシキル研修へ参加した教員からの報告を実施
- 2017/05/26 平成29年度第1回FD講演会（第16回FDeR総会）にて、SILC/SALC、数学SALC（全学SALC）、宇宙SALC、生命SALCの取組を紹介 [\[第16回FDeR総会ポスター\]](#)
- 2017/07/29 平成29年度学生会総会にて、教職サークル部長の学生がサークル活動状況を報告 [\[学生Webnews\]](#)
- 2017/08/24 熊本保健科学大学第1回FDセミナーに、連携事業として東城大学の教員が参加
- 2017/09/07 初年度教育学会第10回大会にて大崎准教授が全学SALCにおける数学教育の取組を口頭発表 [\[学会プログラム\]](#)
- 2017/10/30 第17回FDeR総会にて、神田外語大学のKUIS8の発表結果を紹介 [\[第17回FDeR総会ポスター\]](#)
- 2017/11/17 第18回FDeR総会にて、物理SALC（全学SALC）、生命SALCの取組を紹介 [\[第18回FDeR総会ポスター\]](#)
- 2017/12/01 第19回FDeR総会にて、情報SALC、応用SALCの取組を紹介 [\[第19回FDeR総会ポスター\]](#)

Ⅱ－８． 29 年度の広報活動：本 AP 事業のパンフレット作成

- 崇城大学大学教育再生加速プログラムの取組みについて Vol.3
- 崇城大学大学教育再生加速プログラムの取組みについて Vol.4
別紙参照

Ⅱ－９． 29 年度の広報活動：本学 AP 事業の取組みの新聞紹介

日本私立大学協会教育学術新聞にて、全学 SALC における数学教育の取組が「教授法が大学を変える 2016 年度版」に掲載

ピックアップ

●朝日大学「英語Ⅲ・Ⅳ」

法学部生を対象にした探求型「協働学習」

東北工業大学教職課程センター 准教授 中島夏子

●芦屋大学「大学生生活入門」「基礎演習Ⅰ」

コミュニケーションスキルの向上を通じた

大学生生活への適応支援

関東学院大学高等教育研究・開発センター 専任講師 奈良堂史

●近畿大学「基礎ゼミⅠ」

キャリア設計へと導くデザイン思考プログラム

三重大学地域人材教育開発機構 講師 久保田祐歌

(教育学術新聞2678号(平成29年3月8日付)掲載)


朝日大学	経営学部	専門演習Ⅳ
	歯学部	口腔病理学実習
	法学部	英語Ⅲ、Ⅳ①
芦屋大学	経営教育学部	大学生生活入門
大阪商業大学	総合経営学部	フィールドワークゼミ
近畿大学	経営学部	基礎ゼミⅠ
金城学院大学	国際情報学部	Kinjo International Training
	生活環境学部	給食経営管理論
産業能率大学	情報マネジメント学部	チーム学習ゼミ
崇城大学	総合教育センター	微分積分学Ⅰ・Ⅱ
		薬学基礎数学
高岡法科大学	法学部	社会人基礎力養成講座
兵庫大学	現代ビジネス学部	プロジェクト演習、演習入門
	健康科学部	公衆栄養学Ⅱ
	健康科学部	教育特論Ⅰ
	健康科学部	形態機能論Ⅰ、Ⅱ
	生涯福祉学部	子育て支援地域活動Ⅱ
	経済情報学部	情報システム特論
目白大学	保健医療学部	精神障害治療学・同演習
麗澤大学	外国語学部	国際交流上級演習
	外国語学部	専門科目(自主企画ゼミ)

Ⅲ. 29年度の学生の主体的な活動


Ⅲ-1. 「教職を目指す在學生と先輩教員との教職交流会」を開催

教員採用試験の現役合格を目指す学修サークル「教職サークル」が27年度より立ち上がりましたが、29年度は、本学の同窓会組織の崇学会（教職OB会）と共催で、2018年2月24日（土） 中学、高校で教員をしている崇城大学卒業生と、教職を目指す現役学生たちが交流を深める「教職交流会」を開催しました。この会に、卒業後、県内外で教員として活躍されている卒業生の方々（24名）にお越しいただき、教職を希望する在學生を合わせ40名で班別討議を実施しました。

SOJO UNIVERSITY

 **崇城大学**
SOJO UNIVERSITY

崇城大学AP事業

 大学教員再生支援プログラム

● AP事業によって学生の方に起こった変化（教職サークル発足）

2015年9月 全学SALCを利用した学生の自律学修サークルが立上げ

博士2年から学部1年まで、
教職（工業・情報・理科・美術）
を目指す学生が、自主的に
学修するサークル


崇城大学教職サークル 発足！！

精進授業って
どんな感じ？

現役で通れるか不安...

一人よりも皆
で学びたい！

皆で頑張り、高め合おう！！



SOJO UNIVERSITY



班別討議の様様

本交流会では、今回が3回目の開催となるもので、企画段階から運営までを教職希望学生が参画をし、議論してほしい内容について、事前に崇学会会員の先生方にアンケートをお願いいたしました。教職希望学生が、教師になるために必要な資質や能力を高めるには、今後、学ぶべきこと、教師になって体験するであろう問題、学生生活で心掛けなければならないこと等、いろんな課題があります。班別討議では、それら課題や問題点について討議を行い、その対応策、解決策等を導き出し実践に移すことを特徴としています。

Ⅲ－２．大学院生と学部生のチームが、第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテストで「2017年度最優秀賞・文部科学大臣賞」を受賞。

SOJO UNIVERSITY

③ SILCによる英語教育の結実

～第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト～
(神田外語グループ、読売新聞社主催、文科省・外務省・米国大使館等後援)
本学チームが
2017年最優秀賞「文部科学大臣賞」を受賞



テーマ3: 地球を守れ! 環境保全の新技术を発表 に対し、「球磨焼酎粕を利用した光合成細菌の培養キットの研究開発と販売」

古賀さん (大学院 工学研究科博士前期課程 応用生命科学専攻 1年)
後藤さん (生物生命学部 応用微生物工学科 4年)
ヒエンさん (工学部 ナノサイエンス学科 3年)

決勝では、東京大学・東京外国語大学・鹿児島大学などを抑えて優勝

SOJO UNIVERSITY

2017年12月9日(土)、東京のよみうりホールで開催された神田外語グループ、読売新聞社主催の「第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」において、古賀さん、後藤さん、ヒエンさんの本学チームが最優秀賞である文部科学大臣賞を受賞いたしました。

このコンテストは全国の大学生、大学院生を対象に実施されており今年で6回目となります。大会には全国から641名のエントリーがあり、11月9日(木)に行われた1次予選を通過したのは320人、その時点で本学学生5名3チームが残り、最終審査は東京の“よみうりホール”で行われました。その2次予選・本選では、東京大学、東京外国語大学、鹿児島大学などの強豪校が進出する中、本学チームの古賀さん、後藤さん、ヒエンさんチームのプレゼンテーションが最優秀賞である文部科学大臣賞に選ばれました。

【受賞結果】

■文部科学大臣賞（最優秀賞）

※同時にイオン環境財団賞を受賞（環境教育関連事業への参加資格を得ました）

テーマ3：地球を守れ！環境保全の新技術を発表 に対し、

「球磨焼酎粕を利用した光合成細菌の培養キットの研究開発と販売」

古賀さん（大学院 工学研究科博士前期課程応用生命科学専攻1年 / 熊本県立人吉高校出身）

後藤さん（生物生命学部 応用微生物工学科4年 / 大分県立日田高校出身）

ヒエンさん（工学部 ナノサイエンス学科3年 / ベトナム出身）

※審査について

各テーマについて英語でプレゼンテーションを行いました。2次予選・本選では調査研究やデータに基づいているか、論旨が明確であり理路整然としているか、など英語のスキルだけでなく高いプレゼンテーションスキルが求められました。また、厳しい質疑応答も英語で行われました。今回、文部科学大臣賞に輝いた3名のプレゼンは、ビジネスプランとしてしっかりと確立していたという点が大きな評価につながりました。

※古賀さん、後藤さんは、「第13回 キャンパスベンチャーグランプリ（CVG）全国大会」でも文部科学大臣賞を受賞、今年2度目の文部科学大臣賞受賞となりました。

■トップ50入賞

テーマ4：新たなネット活用法を提案！資源の共同利用

サフィットリさん（情報学部 情報学科3年 / インドネシア出身）

■1次予選通過

テーマ1：ラグビーワールドカップ2019日本開催 キャンプ地をわが町に！

吉田さん（工学部 機械工学科2年 / 熊本県立第二高校出身）

第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト

予想外の賞状も考えて

沼田貞昭審判長（日本英語交際協会会長）
現代の英語教育は、単に英語を教えるだけでなく、
文化や歴史、社会問題などについて、多角的に
理解し、発信する能力を身につけることが重要
だと考えています。今回のコンテストは、学生
が自分の興味のあるテーマについて、英語で
プレゼンテーションを行うことで、その能力を
高めることを目指しています。

スキルと創造性 両立

ミシェル・シーガル氏（在日米大使館領事
顧問領事）全国各地から集まった皆さんが、
英語という外国語で話すスキルと創造性を
競い合っています。このコンテストを通じて、
学生は自分の興味のあるテーマについて、
英語でプレゼンテーションを行うことで、
その能力を高めることができます。

議論で戦う力

村浦優之介氏（東洋大学専攻科長）ビジネスの
世界ではプレゼンテーションスキルが重要
になってきました。今回のコンテストは、
学生が自分の興味のあるテーマについて、
英語でプレゼンテーションを行うことで、
その能力を高めることができます。

理解しやすい話術

鈴木誠彦氏（アジアユース言語研究所代表
取締役）日本人は、相手の目線より自分の
話を優先しがちです。今回のコンテストは、
学生が自分の興味のあるテーマについて、
英語でプレゼンテーションを行うことで、
その能力を高めることができます。

大会のレベル向上

ウイリアム・スミス氏（ロンドン大学
ライター）皆さんのスピーチから多くの
ことを学びました。今回のコンテストは、
学生が自分の興味のあるテーマについて、
英語でプレゼンテーションを行うことで、
その能力を高めることができます。

環境問題 熱い高き

竹本和彦氏（亜細亜大学サステナビリティ
研究センター長）環境問題について、
最新の情報を取り入れた話が多いと感じました。
今回のコンテストは、学生が自分の
興味のあるテーマについて、英語で
プレゼンテーションを行うことで、その
能力を高めることができます。

スポーツ大会 招致に必要

徳増浩司氏（アジアラグビー協会）ワールド
カップを日本に招致するためには、
英語のプレゼンテーション能力が
重要だと考えています。今回の
コンテストは、学生が自分の
興味のあるテーマについて、
英語でプレゼンテーションを行う
ことで、その能力を高める
ことができます。

テーマ絞って集める

トム・ペーカー氏（ジャパン・ニューズ記者）
他人の前で話すのは緊張する。でも、
今回のコンテストは、学生が自分の
興味のあるテーマについて、
英語でプレゼンテーションを行う
ことで、その能力を高める
ことができます。

- 【後援】文部科学省、外務省、文部科学省、国立大学
協会、公立大学協会、日本私立大学団体連合
会、東京経済大学、東京経済大学、全国外国
語教育協会、アジアユース言語研究所、アジア
ユース言語研究所、出版文化促進財団
- 【協賛】株式会社エフエムエフ、エフエムエフ、エフエムエフ
- 【特別協力】サコエ環境、AOKI、イオン環境財
団
- 【協力】東京経済大学、エフエムエフ

「光輝賞」を
受賞した学生は、
そのプレゼンテーションの
内容が非常に素晴らしく、
審査員から高い評価を受け、
賞状と賞品を授けられた。
このコンテストを通じて、
学生は自分の興味のある
テーマについて、英語で
プレゼンテーションを行う
ことで、その能力を高める
ことができます。



自信でスピーチする（左から）吉野さん、ヒエンさん、佐藤さん（右）。東京経済大学から出場した学生が、光輝賞を受賞した。

研究成果 世界へ

「光輝賞」を
受賞した学生は、
そのプレゼンテーションの
内容が非常に素晴らしく、
審査員から高い評価を受け、
賞状と賞品を授けられた。
このコンテストを通じて、
学生は自分の興味のある
テーマについて、英語で
プレゼンテーションを行う
ことで、その能力を高める
ことができます。

自信でスピーチする（左から）吉野さん、ヒエンさん、佐藤さん（右）。東京経済大学から出場した学生が、光輝賞を受賞した。

「光輝賞」を
受賞した学生は、
そのプレゼンテーションの
内容が非常に素晴らしく、
審査員から高い評価を受け、
賞状と賞品を授けられた。
このコンテストを通じて、
学生は自分の興味のある
テーマについて、英語で
プレゼンテーションを行う
ことで、その能力を高める
ことができます。

「光輝賞」を
受賞した学生は、
そのプレゼンテーションの
内容が非常に素晴らしく、
審査員から高い評価を受け、
賞状と賞品を授けられた。
このコンテストを通じて、
学生は自分の興味のある
テーマについて、英語で
プレゼンテーションを行う
ことで、その能力を高める
ことができます。



文科大臣賞を受賞した崇城大学の3人

「第六回全国学生英語プレコンチーンション」(チーンション)の特別賞として、和田外務大臣・野田新田社長賞、ロッキン立大学団体賞(全体の成績が二〇二〇年、東京・一代ニズ流実業団大、山小、山崎雅也賞)。

同コンテストは、グローバル化を推進し、日本の未来における英語を担うべき人材を育成することを目的として、文科省が主催する。チーンションの第一の目標は、日本人の英語力向上、グローバル化の促進、そして、英語の活用促進(英語の普及促進)も目的として、

日、解決力を高め、また、問題解決能力の育成、二、英語を学ぶ、相手に伝える力を育てる。チーンションの第二の目標は、日本人の英語力向上、グローバル化の促進、そして、英語の活用促進(英語の普及促進)も目的として、

合のテーマは、ラビーワールドカップの0-0日本対韓国キーンン地をわが町で、

「日本の英語力向上」をテーマに、地味な守り手、福地健太の新規選手(新入生)、「新入生」(新入生)の共闘(共闘)だった。北海道の札幌まで、六年、大学院、短期大学、高等専門学校、専門学校、白井二、三校から

六回一名が応募。女子選手を勝ち抜いた10組(個人の一部は、グループの形式)が本選に出場した。

本選は、東京大学(女子)のグループが優勝(二回戦)、後援会(女子)のグループが優勝(一回戦)、後援会(女子)のグループが優勝(一回戦)。

2017年12月20日

教育学術新聞 2711号 P.4



崇城大学 大学教育再生加速プログラム 運営委員会

〒860-0082 熊本市西区池田4-22-1

TEL:096-326-3111(代) FAX:096-326-3000